

庄野潤三「プールサイド小景」論

— サバイバルとコミットメントをめぐって —

遠藤 伸 治
有元 伸 子

一 妻を焦点化する〈語り〉と就労しない妻

庄野潤三の「プールサイド小景」〔群像〕昭和二九（一九五四）年一二月）は、細部まで計算された巧緻な小品である。小島信夫の「アメリカン・スクール」とともに第三回芥川賞を受賞し、「サラリーマン生活の不安」をめぐる夫婦の問題を描くテーマや「映画のモンタージュ」的な巧妙な手法が評価されたが、確かに視点の切り替えによる重層的な表現が巧みだ。特に、誰のものでもない、あるいは誰のものでもある風景的視点から、電車の中のサラリーマンたちの視点を経て、水泳の「コーチの先生」の視点に切り替えられ、そして「青木夫人」の視点に落ち着いていくという冒頭の場面からのスピーディーな視点の切り替えは、多元的な意味の重なり合いを映

像的・空間的に表現し、「プールサイド小景」という作品のテーマをシンボリックに示している。読者が、先を読み進んだ後、この冒頭の場面を振り返れば、そこに様々の意味を新たに発見することになる。

通勤電車に詰め込まれたサラリーマンたちの姿は、現在も残存するいわゆる通勤地獄の光景であり、現代の「サラリーマンの苦悩」の象徴的映像の「一コマであると言えよう。そして、その「暑気とさまざまな憂苦とで萎えてしまっている哀れな勤め人たち」の視線は、「プールいっぱいに張った水の色」と女子選手たちの「活気に満ちた姿態を捉え、「ほんの一瞬、慰めを」求める。そして、「コーチの先生」の視線がプールにいる青木一家の様子を捉える。「コーチの先生」は、「あれが本当に生活だな。生活らしい生活だな。

夕食の前に、家族がプールで一泳ぎして帰ってゆくなんて……」と心を打たれる。

ところが、続いて「青木氏は、一週間前に、会社を辞めさせられたのだ」と明かされ、読者は冒頭の場面を眺め直すことになる。「あの織物会社の課長代理」、最も忙しいはずの中間管理職である青木氏が夕方に居るはずの場所は、良くて満員の通勤電車の中、むしろまだ会社のオフィスなのであって、プールにいるというのは普通ではない、クビになったからなのだ、と冒頭の場面の意味を読み直し、一旦は納得する。

そして、この後「プールサイド小景」は、ほぼ「青木夫人」の視点に寄り添ったへ語りによって進行していく。夫が会社の金を使い込んでクビになった「夫人」の衝撃を前にして、「生活らしい生活」という「コーチの先生」の感動は、はかない夢として吹き飛ばしてしまうかに見える。「生活らしい生活」、人間らしい理想的な家庭生活の夢は一瞬にして消え、たちまち現実社会の圧力、実生活上の憂鬱がのしかかってくる。「夫人」は、「課長代理にまでなっているクビにされた」夫のことを「勤めの厳しさというものを夫が身に沁みて感じる」ことがなかったからに違いない」と思い、その夫を「遊び好きの飲兵衛だが、それだけ働きのある夫」だと思っていた自身の愚かしさを意識しないではいられないし、自分たち夫婦の十五年間の結婚生活が「まことに愚かしく、たよりないものであったこ

と」に向き合わざるを得ない。

ここで問題となるのは、へサラリーマンの苦悩へやへ不安へなどといったへ現代社会批判へを焦点に「プールサイド小景」を読み解こうとするならば、なぜ夫に寄り添う形で、サラリーマン自身の立場からへサラリーマンの苦悩へが語られるのではなく、その妻の立場に寄り添って語られているのか、ということである。夫がへサラリーマンの不安へについて「僕」という一人称で語る部分もあるが、それらは聞き手としての妻に寄り添う全体的なへ語りへの中にコラーージュ風に埋め込まれているのである。

次に、「プールサイド小景」を発表時の時代のなかに置いてみよう。「プールサイド小景」の発表は、一九五四（昭和二九）年。翌年には、保革伯仲の「五五年体制」、そして高度経済成長の時期に突入する、まさにその前夜の時期に書かれた作品であった。一九五五年は、政治・経済状況の大きな変革期として見られることが多いが、家族をめぐる状況もこのあたりから大きく変遷している。公私の領域が分離され、性別役割分業に伴って女性が主婦化し、少子化・核家族化が進む、いわゆる「家族の戦後体制」である。

冒頭の電車の様子も、公的領域（会社）と私的領域（家庭）との分離を通勤風景という目に見える形で表象する映像であり、会社の金の使い込みによる臆首という設定も公私の領域の分離の厳格さを示しているよう。社員の夫と専業主婦の妻、子どもが二人、という

のも典型的な核家族の設定であり、これらの設定に関する限り、「ブルサイド小景」は、サラリーマンの夫と専業主婦の妻とのセットが大衆化していく、性役割の五五年体制・家族の戦後体制を反映しているように見える。

郊外の一軒家。藤棚やテラス、デッキチェア。「大きな、毛のふさふさ垂れた、白い犬」。子どもたちは私立の付属小学校に通学。描かれているのは、都市に住み、手の届く範囲の少し高級で洋風な生活を営む中流階級の家族の姿である。貿易商をしていた妻の実家は戦前はゆつたりした暮しだったが、戦後はすっかり逼塞し、夫も兄弟三人が役所や会社勤めの身で、経済的に親族に頼ることはできない。夫婦とも金遣いにしまりはなく、貯金もない。青木氏の誠意は、そんな状況下で起きたできごとだった。

子供がいなければ、何とかまだ暮しを立てる方策があるかも知れない。自分が働きに出て、ともかく自分一人の口を糊することは出来ないことはないと思う。それも、身に何の技術も持たない彼女には、よほどの覚悟が必要に違いないが。しかし、小学校に通っている男の子が二人いては、それは到底出来ない相談である。

そう云う風に考えて行くと、夫が新しい働き口を見つけることに成功しない限り、家族四人は一緒に暮すことは出来ないことになる。だが、四十を過ぎた女房持ちの男が、会社をくびに

なつて世の中に放り出されたものを、いったいどこに拾つて養つてくれるところがあるだろうか。

既婚女性の就業率が過半数を越えて久しく、また深刻な不況のなかでセーフティネットとして共働きを選択する者たちが増えている現在、特に若い世代の読者にとって登場人物との同化を最も妨げるのがこの箇所である。なぜ、妻は、夫がクビになり、収入が絶え、貯金もない状態で、なお自分が働かないことをここまで自明のこととして捉えるのか。

平井修成は、夫の誠意のもつ深刻さは今日の比ではないとし、その理由を、昭和二九年の時点では「終身雇用制は、極めて安定した慣行として社会に定着していたし、一方、主婦の就労は、未だ一般的なものではなかった」、「サラリーマンの転職も主婦の就労も非常に可能性の低い時代に、『ブルサイド小景』は書かれている」からだと説明する³。時代状況としては確かに、落合恵美子が言うように、一九五〇年代から七〇年代は、「既婚女性は主婦になるという役割がほとんど他の選択肢を許さないほど強力に社会的に強制されていた状況下」であった。男性労働者の不足によって女性があらゆる職種に進出した敗戦直後と異なり、アメリカの占領政策の転換に伴う行政・企業整理のなかで女性失業者が増加し、「職業における男女平等と女性の解放」が「暗礁に乗り上げる」のがこの時期であり、一九五四年の時点で、「大企業を中心に男性には年功序列の世帯賃

金が保証されつつあるが、未既婚を問わず、女性の賃金は、家計補助の枠内にとどめられていた。一九五一年の調査では、「家庭婦人の8割が既婚であるのに対して、働く婦人は大部分が未婚であり子供を抱えての職場通いは極めて少なく、1割以下に過ぎない」。

このように、労働市場における男女の賃金や待遇の格差や性別役割分業意識の浸透を鑑みれば、小説の該当箇所は自然な記述であり、読者が登場人物に同化しえないのも小説発表時と現在との意識の相違でやむをえないとも言える。ただ、当時でも既婚女性の1割は働いており、二人の子どもも小学四年生と五年生と、学童保育などの施策の不備とは関わりのない学齢に達している。夫が無収入な状況では、妻が働くことも少なくとも選択肢の一つに数えられるだろう。つまり、妻は、作品発表当時の時代状況を考慮したとしてもなお、彼女自身が働かざるをえないという強い圧力に直面している。それにもかかわらず、妻の就労の可能性は「到底出来ない相談である」と無視されてしまう。これはなぜなのか。

本稿では、「ブルサイド小景」において、なぜ「語り」によって妻が焦点化されるのか、また、なぜ妻の就労の可能性は無視されるのかという二つの疑問から出発し、この作品に対する今日的な評価を行ってみたい。

二 思考停止させる「語り」

ブルから帰って夜になると、妻は、夫によく行くバアの話をしてくれるように声をかける。すると夫は、バアの女性と一度だけ浮気のチャンスがあったような気がするが、それを逃してしまったという話をする。しかし、その話を聞き終えた妻は、夫の使い込みの影に女がいると直感する。

「女がいる。夫が大金を使い込んだのは、女のためだったのだ」
この考えが、夫の話を聞いている途中、霹靂のように彼女を打った。

彼女は自分の内部に生じた動揺を隠した。そして、夫が話し終ると、さり気なく、その種の告白を切り上げさせたのである。(略)

どうでもいいことは、全部さらけ出したかのようにしゃべる。そして、それらの背後に、男が針の先もふれないものがあるのだ。

メデューサの首。

彼女はそれを覗き見ようとしてはならない。追求してはならない。そっと知らないふりしていなければならないのだ。

後藤聡子は、妻が「妻という役割に固執すること」「夫の抱え込んだ闇に踏み込むことを回避している」と、「危機」を「見ないで

いようとする「防衛機制」が作品に働いていると述べる。また、助川徳是は、妻が事件の真相を知ろうとしないのは「育ちの良い、可憐な」性格の「彼女にとってあまりに恐ろしいことだから」であるとし、こうした女性を好む作者の「女性観の古風さ」に帰す。

しかし、物語を整理してみよう。まず、妻が夫に話を促している。しかし、夫は自ら「抱え込んだ闇」について語ることを回避し、「どうでもいいこと」としか思えないことを語る。促されているにもかかわらず、夫は自分の使い込みの真相を明かそうとしないのだ。その夫の態度から、逆に、妻は、夫の使い込みは女のためだったのだという真相(?)を直感してしまう。その上で、妻は、「追求してはならない。そっと知らないふりしていなければならぬ」と、女に決して真相を見せることはない、恐ろしいことには触れさせないという夫からのメッセージを受け取る。夫の告白によって、妻の思考は、女のために金を使い込んだという憶測で停止させられてしまうのだ。

夫の姿勢には大きな矛盾がある。夫はすでに、使い込みや贓首という恐ろしいことに妻を直面させ、妻が何も知らなくても安心していられる状況ではないようにしてしまったにもかかわらず、相変わらず妻に情報を十分に与えない。妻が真相を聴こう、視ようとしても、夫の独善性によってそっと覆い隠されてしまうのだ。この夫の矛盾した姿勢が、結果的に妻を苦しめ、疑心暗鬼の状態、極度の不

安に陥れる。

別の晩に夫は、サラリーマンたちの心の内に常にある「怯え」について語るが、やはり抱え込んだ「闇」については語らない。この部分は「僕」という夫の一人称の「語り」なのだが、すべてをさらけ出さず、妻の思考を途中で停止させるといふ「語り」の姿勢はより明白である。「プールサイド小景」は、『群像』初出時と、単行本・全集等との間に多少の本文異同があり、以下の引用の「」は、単行本に収録される際に削除された部分である。なお、「」内の部分のみ、初出時のままに旧仮名遣いで引用している。

僕がどんな時びくびくしないでここに坐っているだろう。自分の背中の上から二三寸飛び上るかと思うほど、どきんとするのは椅子の上から二二三寸飛び上るかと思うほど、どきんとするのは、だが、このように絶えず何かに怯えているのは、僕ひとりだけではないのだ。「お金を使ひ込んだから怯えてゐるのではない。こんなに怯えてゐたから、それでお金を使ひ込むやうになつたのだ」という述懐は、夫がなぜ金を使ひ込んだのかという事件の真相にもっとも近いものであろう。少なくとも、この「怯え」と使い込みという事件と

後に削除された部分には、夫の述懐が()に書き込まれていた。この「お金を使ひ込んだから怯えてゐるのではない。こんなに怯えてゐたから、それでお金を使ひ込むやうになつたのだ」という述懐は、夫がなぜ金を使ひ込んだのかという事件の真相にもっとも近いものであろう。少なくとも、この「怯え」と使い込みという事件と

が一体のものであることを明かしている。しかし、単行本では、こうした、夫が感傷を吐露するような叙述、庄野が愛読していた梶井基次郎的な詩的な記述は消され、夫は自分がなぜ金を使い込んだのかを語ることはない。

彼等を怯えさせるものは、何だろう。それは個々の人間でもなく、また何か具体的な理由というものでもない。それは、彼等が家庭に戻って妻子の間に身を置いた休息の時にも、なお彼等を縛っているものなのだ。それは、夢の中までも入り込んで来て、眠っている人間を脅かすものなのだ。もしも、夜中に何か恐しい夢を見てうなされることがあれば、その夢を見させているものが、そいつなのだ。

「それは、あらゆる勤め人の心に深く棲みついてゐるものだ。それを意識する深さに相違はあつても、誰もがそれを感じてゐるのだ。

そこを離れては生きて行けないといふ気持が強ければ強い人ほど、その内心に潜むものは大きい。そして、そこを離れては生きて行けないといふ思ひを抱かない勤め人といふものは、いつたいどれだけ存在するだらうか。」

ここでも、後に削除された部分は、会社勤めをする男たちに深く巣くう「怯え」の感情を畳み込むようにしつこく訴え、会社勤めの非人間性を告発するところまで迫っているのだが、こういった組織

の非人間性を摘発するような記述が、単行本化に際して消されていく。削除の結果は明らかであろう。「怯え」を生み出す社会的な原因、会社員生活の非人間性を告発するような部分が消され、最終形では、内実が明瞭ではない「怯え」の感傷を夫が抱えこんでしまっていること自体が前景化している。こうなると、夫の告白を聴く妻には、もはや夫の「怯え」と使い込みとのそもそもの因果関係をたどることも、「怯え」の社会的要因をたどることもできない。夫の「怯え」の感傷そのものについては知らされても、夫を使い込みに追い込んだ社会的要因の手前で、妻の思考は停止させられてしまうのだ。

したがって、妻は、バアの話から「夫が大金を使い込んだのは、女のためだったのだ」(会社員生活の非人間性のためではなく)と直感したように、ここでも「妻や子供たちを見ると苦しくなつて、バアやキャバレーで女と一緒にいると苦痛を忘れるというわけなのだ」という意味を読み取る。男たちが常に「怯え」ているのは、妻子を養わなければならないからだ、だから、家庭に安住できず、バアへ行き、重圧をまぎらわせるのだ、しかし、その夫が、会社をクビになつて、家庭へ帰ってきた。夫が家に一日中いるという生活に当惑していた妻も、「一週間もその暮しを続けると、その方がいいという気がして来る」。妻の思考は、夫婦・家族・家庭という枠組みの中に止められ、社会へは出て行けない。

夫によるこの一人称の「語り」の部分には、「プールサイド小景」という作品全体の中で、「サラリーマンの苦悩」が最も直接的に語られ、「社会批判」につながる部分である。しかし、この部分こそ、「社会批判」に向かうと同時に、ある一定の地点で、その「社会批判」に向かう部分が削除され、妻の思考を家庭内に閉じ込み、作品を夫婦・家族・家庭を描いたものに限定していく。それが、ここでの「語り」の、そして作者の姿勢である。そもそも「社会批判」を主張することは、夫の職首の理由が、会社の都合による不当な解雇であるとか、社会的・経済的状況の変化によるいわゆる現代のリストラではなく、夫の使い込みだったという設定によって、最初から大きく限界づけられ、制限されている。

妻に真相を語らず、不安に陥れ、その思考を停止させるという点において、夫の一人称の「語り」と妻の視点に寄り添う全体の「語り」は、巧妙な共犯関係にあり、言わば、不誠実な語り手である。それは、妻にとっただけではなく、作品を通読する読者にとっても同様であって、夫の「怯え」は、「社会批判」につながると解釈されると同時に、結局「それは個々の人間でもなく、また何か具体的理由というものでもない」、生存それ自体が呼び起こす根源的・実存的な「不安」なのだといった解釈に落ち着かざるを得ない。

三 「社会批判」と性別役割分業との結びつき

「プールサイド小景」の「語り」が、妻に恐ろしいことには触れさせず、妻の思考を夫婦・家族・家庭の枠組みの中に止めるものだとすれば、性別役割分業が自明視されているのも当然であろう。妻の就労の可能性は「到底出来ない相談である」でかたづけられていたが、性別役割分業を自明視することの背景には、サラリーマンと専業主婦をセットとする同時代の強大な刷り込みがある。と同時に、夫の「語り」に示されているように、仕事那不毛な消耗としてしか表象されない日本社会の現実に対する語り手の強い認識がある。仮に、夫が、会社での仕事について、達成感や自己表現、個人の能力を超えて目的を達成する組織の力といったイメージを、出社時に「充足した顔をしている」一部のサラリーマンのイメージを、わずかも交えて語ったならば、妻の思考はまったく違ったものになったかもしれない。しかし、常に逃れられない「怯え」を抱え込んだサラリーマン、早朝から深夜に及ぶ長時間の労働、満員電車での通勤、バアやキャバレーでのストレス発散——これでは、妻が自らの就労の可能性を考慮しないのも無理はない。

そして、「プールサイド小景」では、こうした日本の企業社会の現実を批判し、労働者同士の横の連帯によって過酷な労働条件を改善し、妻も就労できるようにしていくといった社会変革の主張では

なく、企業社会の外庄から逃れた癒しの場としての家庭に妻を囲い込むことが、最初から選択されている。「プールサイド小景」においては、ヘサラーマンの苦惱、企業組織による個人の圧迫といった「社会批判」につながりうるものと、性別役割分業という制度的意識とは一体のものであり、「社会批判」として解釈可能なものが、性別役割分業という制度的意識をより強固にしているのだ。

もしも、夫がこうして毎日外へ働きに出て行かないで、家族が生活してゆけるものだったらいのになあ。彼女は、自分たちが太古の時代に生れていたとしたら、それが普通のことであつたのと思う。

男は退屈すると、棍棒を手にして外へ出て行き、野獣を見つけると走って行って躍りかかり、格闘してこれを倒す。そいつを背中につつかついで帰って来て、火の上に吊す。女子供はその火の廻りに寄って来て、それが焼けるのを待つ。もしそういう風な生活が出来るのであつたら、その方がずっといいに決つている。

男が毎朝背広に着換えて電車に乗って遠い勤め先まで出かけて行き、夜になるとすつかり消耗して不機嫌な顔をして戻つて来るという生活様式が、そもそも不幸のもてではないだろうか。彼女は、そんなことを考えるようになった。

夫から会社勤めのつらさ、「怯え」について聞かされた後で、妻

が太古の時代の生活を空想する場面である。公私の領域がはっきりと分離され、男が私的領域（家庭）から外の領域（会社）へ働きに出かける（近代家族）のあり方にひずみがあることを、彼女は夫の「語り」によって知る。そして、男が外に働かずに出かけなくても家族が暮していける理想的な生活として、近代からほど遠い「太古の時代」の生活を理想として思い描く。

だが、彼女が空想している太古の生活もまた、やはり「男」が獲物を家に持ち帰り、「女子供」がそれを待つ、という形態である。現実の原始時代では木の実や貝の採集が行われていたわけだが、妻には自分が採集して食物を持ち帰るといった発想は浮かばない。空想の中ですら、妻が働きに出る可能性は最初から排除され、性別分業のない男女の関係は想像もされず、家庭の中に居て夫の帰りを待つ妻の姿が強固に語られる。

その姿は、大きな「白い犬」を飼い、子どもを私立の付属小学校に通わせるという設定とうまく調和していて、そのような階級のハビトゥスの反映、戦後に実家が逼迫して、彼等がもはや無産階級に過ぎないことが明らかになつてもなお、彼等を縛っている慣習として説明することができるようになっていく。彼女を「青木夫人」、「夫人」としか呼ばず、専業主婦の役割に固定する「プールサイド小景」の「語り」の力、テキストの力は強い。

最後に、再び「プールサイド」の風景が、電車のサラリーマンた

ちの眼に映る。しかし、青木一家の姿はそこにない。妻が専業主婦の役割を止めないのと同様に、夫は、再就職のあてもないまま、子供たちの不審と近所の「疑わし気な眼」を気にして、定時に家を出て出勤するサラリーマンのふりをするのだ。そして、妻は、夫が別の女のもとを訪ね、一夫一婦の夫婦関係が壊れる妄想に脅かされ、(帰って来てくれさえすれば…)と、夫が癒しと休息の場としての家庭に帰ってくることを願い、待つ。「十日間の休暇」は終わったのである。「コーチの先生」はここにも登場し、今度は「休暇」の終りを印象づける。

四 私的領域の確保と社会的現実へのコミットの問題

「プールサイド小景」という作品が非常にアイロニカルであるのは、互いに向き合って話し合い、心を通わせる夫婦らしい夫婦、「夕食の前に、家族がプールで一泳ぎして帰ってゆく」「生活らしい生活」という夢が、夫が家族のために寸暇を惜しんで、懸命に働くことによって得られたのではなく、逆に、クビになることによって初めて実現したものだということである。一生懸命に働かなければ家族を養っていけない。しかし、一生懸命働けば働くほど、家族と過ごす時間は失われ、家庭生活は形骸化していく。これが日本の社会の仕組みであるならば、現実¹⁾に生活していくことと、「生活らしい生活」を送る夢とは、決して両立し得ない。「プールサイド小景」

は、まさにそのような作品であり、両者の接点は示されていない。そして、「生活らしい生活」の実現は、現実にも庄野が社員であることを辞めた「プールサイド小景」以降の作品に描かれていくことになる。

先に「プールサイド小景」の設定が、公私の領域の分離、性別役割分業という五五年体制・家族の戦後体制を先取りして反映しているように見えると述べたが、しかし、問題は単純ではない。私的領域であるはずの家庭は、最初からすでに失われ、形骸化してしまっている。「夫の帰宅が毎晩決って夜中であり、朝は慌てて家を飛び出していくという日が続いて来た」、「結婚した時から夫はそういう風だった」と妻が回想するように、「生活らしい生活」は最初から非在のイメージにすぎず、実在したことはなかった。夫はほとんどの時間を会社で過ごし、家庭ではわずかな睡眠時間を過ごすだけである。一方、妻は家庭で家事と育児に専念し、夫のことも、会社のこともその意味を考えてもみなかった。

夫の私的領域は、家庭ではなく、会社と家庭の間に立ち寄るバーであり、それがストレスや重圧を癒す機能を担っている。家庭は、一見公的領域から遠く離れているように見えて、実は企業組織にのみ込まれ、精神的休息や癒しの機能を持ち得ない。私的領域としての家庭の自律的意味はきわめて小さい。その無意味に近い小さな場所²⁾で、妻は十五年間を「うっかり」過ごしてしまったことに気づ

く。会社をクビになり、社会秩序からはじき出されたから家庭が失われるのではなく、現実の中ですでに最初から家庭は失われていたものであり、結婚する以前のイメージ、過去の夢としてしか存在していなかったことが、へ近代家族」とはそのような空疎な家族制度であることが、夫の誠首によって歴然としたのだ。

妻は、クビになった夫に対して「勤めの厳しさというものを夫が身に沁みて感じるものがなかったからに違いない」と思うが、実はまったく逆であつて、夫が「勤めの厳しさというもの」を始終感じ続けていたことを知る。彼女自身が、家庭の外の領域である会社やサラリーマンの夫について真に関心を持たず、社会に流通するステレオタイプを通してしか見ていなかったにすぎないことに気づく。妻は、「へたり込んでいるばかり」の夫を励ましてプールへと送り出しながら、元氣を取り戻した夫を見て「無邪氣と云うべきか、馬鹿と云うべきか、分らなくなつて、妙な気持」になるが、プールでの夫は、帰宅までの間の一時的なものであれ、重圧から解放され、実際に幸福だったのだ。一生懸命に働けという現実社会の圧力が強いほど、「生活らしい生活」という一瞬の夢は輝かしいのであつて、「コーチの先生」ばかりではなく、誰もが心を動かされずにはいられない。「哀れな勤め人たち」の視線は「ほんの一瞬、慰めを」求めてプールに向かう。彼らは皆、できることならば電車から抜け出し、プールサイドに立ちたいのであり、「コーチの先生」という内

実を知らない傍観者による誤解に思えたものが、やはり理想の生活ではあるのだ。

妻は、それまで知らうともしなかった、サラリーマンたちの心の内にある「怯え」について知る。その「怯え」から開放され、夫婦が互いに向き合う、夢のような「生活らしい生活」が突然現実の中に立ち現れたのだ。最初は当惑していた妻も「その方がいいという気がして来る」。それは、夫がクビになり、決定的に企業組織から切り離されることなしには、日曜日ごとの外出などでは得ることのできなかった本物の解放感なのだ。同時に、早く社会の体制の中に復帰しなければという焦燥感と苦痛も襲う。不安と解放感、焦燥と苦痛、妻は、これらの感情を自身のこととして共感していく。

妻の立場に寄り添つて語られる「プールサイド小景」とは、こうしたことに妻が気づき、本当の意味で家庭に帰ってきた夫を妻が迎え、家庭への夫の帰帰を願う作品である。戦前から性別役割分業を内面化し、専業主婦の役割を自明視していただであろう妻が、戦後も過ぎて、世間では専業主婦が一般化していく中で、まったく逆に、専業主婦では居られないような状況にさらされ、いくらか成長し、それにもかかわらず専業主婦の役割からは動こうとしない物語、つまり、五五年体制・家族の戦後体制に対して、形骸化した現実の家庭ではない、本来の家庭の持つ精神的休息や癒しの機能の再生を願う作品なのである。

妻は、夫の使い込みの責任を追究しないし、クビになった夫の頼りなさを責めることもしない。離婚も考えない。「殆ど聞こえないくらいの溜息を」つくだけで、相変わらず夫を元気づける。妻は、理不尽にもわけのわからぬままに、五五年体制・家族の戦後体制からはじき出され、しかし、それによって、それまでの夫婦、家族、家庭がまやかしであったことを知る。その結果、ある程度の洞察とアイロニーとを身につけるのだが、例えば夫の通うバーの姉妹（戦前にはハルピンで余裕のある暮らしぶりだったが、引き上げ後にバーを経営している）のように、あるいは敗戦後の太宰治「ヴィヨンの妻」のように、自ら働いてみようというだけの自信を獲得するようなことはない。夫を批判し、夫から自立しようなどとは思っていない。ましてや、その夫をはじき出した社会を批判し、社会と向き合う個人として対峙することなどない。

このような妻の人物像と、夫による（語り）、作品全体の（語り）、最初と最後のプールサイドの景色の描写による（語り）、そして作者の意図とは緊密に結びつき、有機的に一体をなしている。妻を家庭の中から出そうとはせず、家庭内で夫の帰りを祈らせる、そうした（語り）が「プールサイド小景」という作品全体を強固に統御し、そこからはみ出しそうな部分はあえて意識的に削除される。妻の視点に寄り添いながら、時に彼女の心理を緻密に解剖し、冷静に突き放す全体の語り手は、それを語り手／作者の意志としてではな

く、妻の心理に帰する。語り手は意識的に制御しつつ、性別役割分業を刷り込まれ、習慣から自由になれない妻の人物像を緻密にリアルに組み立てていくのである。

妻にとって「生活らしい生活」に最も近かったのは、おそらく戦前の「比較的ゆつたりした暮らし」であり、夫にとっては「バレーボールの選手をしていた」学生の頃なのかもしれない。戦争によってそれらは失われ、そして戦後が過ぎさろうとしても回復することはない。ただ、それを奪うものが、戦時体制から五五年体制に変わっただけであり、巨大な現実社会の圧力によって私的領域が脅かされ、奪われることは変わらないのだ。しかし、妻も夫も、（社会批判）や社会改革の主張には向かわず、子供とのプール通いで、「十日間の休暇」でやり過ごそうとする。巨大な現実社会の圧力の中で、それに対抗する小さな私的領域、小さな解放区としての家庭が実現してほしいというささやかな願望、夢が妻の心の中に沸きあがるだけである。それは、与えられた現実の中で最善を尽くすしかないという、いかにも誠実な一庶民（いわゆる知識人ではない）の態度にも見える。

「プールサイド小景」では戦中・戦後のことは空白になっているが、このような態度は、嵐の間は身を縮めて過ぎ去るのを待つといった、戦中・戦後の中で身についた発想法、サバイバルのための処世術であるのかもしれない。重圧の強い社会状況下で潰れてしまわないた

めに、小さな私的領域に自分の拠りどころを限定し、それを現実社会の圧力から守り抜こうとする姿勢。こうした姿勢のもと批評性については、戦前・戦中・戦後の硬直した主義主張、公的観念闘争の不毛性や危険性と並置・比較し、歴史的・相対的に評価するべきだろう。

江藤淳は、庄野の「夕べの雲」（昭和三九年）を「治者の文学」だと言い、家長たる大浦に「怯えの感覚と「不寝番」の意識」を読み取った。「彼はその怯えを内に隠して、あたかも「天」によってその権威を支えられた「父」であるかのように、生活している」（傍点ママ）と、家長意識が濃厚になっていく後の庄野文学を考えていくうえで見逃せない指摘を行う。また、村上春樹は、庄野の「静物」（昭和三五年）を、妻の自殺未遂事件を契機として、主人公が「奥さんを守り、子供たちを守り、家内を安定させる」「家父長（patriarch）としての新しい役割を背負うようになった」物語¹⁰だと見る。その上で、主人公が家父長の椅子に自らの身をおさめることを、「現実というものの重みを、ひとつの責務として引き受け」「誠実な決意」ではある一方で、「一種の「保守回帰」の意味を帯びていたこともまた確か」だと解説する。

戦後の硬直した主義主張、観念的闘争の後に「第三の新人」の一人として庄野潤三は登場したわけだが、小さな私的領域に自分の拠りどころを限定し、それを現実社会の圧力から守りつつ、同時に、

現実社会の重みを受け止め、閉鎖的な硬直性と独善性に陥らないようにする、という問題は、安保闘争から学園紛争という硬直した主義主張による観念的闘争の後に登場した村上春樹にとっても、創作上の中心的な問題であり、村上の「第三の新人」たちに対する方法上の興味、愛着と共感¹¹は、そうしたところにあると思われる。

だが、庄野の場合、すでに「ブルサイド小景」の中に、すべてを語らず、妻を家の中に囲い込もうとする独善的なへ語り¹²が見て取れ、そして、その後の彼の文筆活動を見ていると、「ブルサイド小景」で妻が夢想した太古の家族を實踐して、満足しているように見える。職住同一で生計をたてる家長としての夫と家事・育児を担う妻がつくる、いさかいのない家庭。しかし、職住同一に誰もができるわけではなく、会社で働かざるを得ない側から、こうしたライフスタイルを現実逃避として批判することは容易であろう。もちろん逃避なしに人間が生きていけるわけではないから、問題は、逃避ばかりを続ける硬直性と現実を閉ざし続けることによって陥る独善性にある。「生活らしい生活」として理想化する果てが、結局は性別役割分業から一歩も出ない、保守的な硬直した夫婦像しか提示していないではないか。

日常生活の記録風になってくる庄野の近作では、もはや、家長たる男も不安を抱くことはない。少なくとも、不安感が表現されることはない。「第三の新人」とくくられていた頃から彼らは「小市民

的」だと嘲られ、そうした評価を逆手にとるかたちで登場したのではあったが、もはやイヤなこととは見ない、楽しい、嬉しいことだけを運びとって書くのだ、といった視線は、現実との間の緊張感を失っているようにも見える。¹¹ 初期作品にあった、夫婦のすれ違いを読み取っていく繊細な視線は消え、よく言えば透徹した、見ようによっては現実社会の圧力とは無縁の高みに立って、庄野は「癒し」の小説を書き続けている。

「プールサイド小景」は、庄野が「現実というものの重み」に正直に怯えていたときの作品であり、そこに描かれた価値とイメージは、社会的重圧の強い現在も依然として魅力的な一面をもつ。特に、冒頭の電車のサラリーマンたちとプールサイドの青木一家との対比は、サラリーマンの現実と「生活らしい生活」という夢とに引き裂かれた高度経済成長期以降の日本の社会を鮮やかに切り取り、対比させている。その対比の鮮やかさは、それだけで「プールサイド小景」を名作とするに足ると言えなくもない。と同時に、硬直性・独善性の萌芽も見られる、境界に位置する作品なのである。

注

1 以後も、助川徳是が「プールサイド小景」こそ、庄野の夫婦小説の集大成とみるべきだろう」と述べ（「プールサイド小景」『鑑賞日本現代文学29 島尾敏雄・庄野潤三』一九八三年、角川書店、綾目広治も「かつては生を意味付け、人生の抛り所ともなった宗教や共同体などにはや頼ることの

出来ない現代人の、その最後の寄る辺」が「家庭」であり、その「家庭」を失う「地盤喪失の感覚」を書くことを通じて「現代人の疎外状況」が語られていると評した（『庄野潤三の家族小説―一九六〇年代を中心に』『国文学攷』一四八、一九九五年二月）。また、山中秀樹は「プールサイド小景」は「現代人の典型であるサラリーマンの不安やつらさ」を描き出しており、「人間の存在そのものが常に脅かされている現代を浮かびあがらせて」「現代を批判」する小説だと見る（『庄野潤三作家の姿勢について』『日本文学誌要』四九、一九九四年三月）。

2 落合恵美子は「高度成長に伴い産業構造が転換して、それまでの農業者・自営業者を中心とする社会から、雇用者すなわちサラリーマンを中心とする社会に変わった。女性に注目すれば、以前は既婚女性といえは「農家の嫁」や「自営業のおかみさん」で、家族と共に働いているものでした。ところがサラリーマンの妻はたいてい専業主婦になったので、高度成長という大きな社会の変化の中で、サラリーマン家庭の増加に伴い、女性は「主婦化」したのです」と説明する（『21世紀家族―一家族の戦後体制の見かた・超えかた』「1女は昔から主婦だったか」有斐閣、一九九四年）。

3 「庄野潤三『プールサイド小景』論―文学の二十世紀的達成として」『常葉国文』二〇、一九九五年一月

4 『近代家族の曲がり角』第五章 個人を単位とする社会」角川書店、二〇〇〇年

5 藤井治枝『日本型企業社会と女性労働』「第1章 家族制度の解体と女性労働」ミネルヴァ書房、一九九五年

6 高橋久子ほか監修『戦後婦人労働・生活調査資料集 第二五巻 生活篇

7 婦人の地位と意識「封建制についての調査」（昭和二六年四月、総務）クレス出版、一九九一年

7 「庄野潤三論―（見せ消し）と（防衛）」『国文学解釈と鑑賞』二〇〇六

年二月

8 注1に同じ。

9 『成熟と喪失』河出書房、一九六七

10 「静物」『若い読者のための短篇小説案内』文藝春秋、一九九七年

11 川本三郎は、庄野の近作について「小さな日常の幸福を浮き立たせるためには背後にある負の要素はいっさい切り捨てて。強靱な覚悟である。逆にいえば、「家庭の幸福」の背後に広がる現実の不条理な闇を強く意識している」とし、その要因に「戦中派」であることを指摘している（郊外に憩いあり―庄野潤三論『新潮』二〇〇二年一月）。また、山中秀樹も、「庄野の「いやなことは見ず、いやなことは書かない」という作家としての在り方」の背後に「戦争体験によって植えつけられた「運命」論的人生観」を読み取る（『庄野潤三と戦争』『私小説研究』四、二〇〇三年三月）。

付記「プールサイド小景」の本文は、『庄野潤三全集』第一巻（講談社、一九七三年）による。また、本稿は、遠藤と有元が草稿の交換と討論を繰り返すことよって作成したものであり、内容に関して両名が等分に責任を負う。

― えんどう・しんじ、県立広島大学教授 ―

― ありもと・のぶこ、広島大学大学院文学研究科教授 ―